

EurekaXIII

六年制通信 No.30 令和7年12月23日(火)号

あたりまえを真剣に

二学期の終業式は毎年「除日起講」の話をします。1年生は初めてですね。林羅山のこの言葉は、六年制の全員が「学問の大禁忌は作輟なり」と並んで大切にしてほしいと思っています。卒業しても年末を迎えると思い出してくれると嬉しいですね。ちなみに「学問の大禁忌は作輟なり」は吉田松陰の『講孟余話』(岩波文庫)の46ページにあって、佐久間象山の言葉だと注釈がしてあります。一度自分の目で確かめてごらん。

さて、六年制の学校説明会などで、教育上大切にしていることは何かという話をします。その時には「学問の大禁忌は作輟なり」などは使いません。皆さんは耳にタコができているでしょうが「辛抱強く学ぶ意欲を身につける」ことが何より大事であるという話を入学前の小学生と保護者にしています。君たちの多くはこれを聞いて入学してきたことでしょう。また、説明会では特に「あたりまえを真剣に」を強調しています。今日はこのことを少し詳しく書いてみましょう。「あたりまえを真剣に」行うことがなぜ大切なのか。残念ながら時間の関係もあって、説明会ではそこまで踏み込んで話していません。「あたりまえを真剣に」行くとその先に何があるのでしょうか。まず、「あたりまえを真剣に」行くと適当に行うよりも時間がかかります。前にも書きましたが、人間は時間をかけた分だけその対象を大切にようになります。あたりまえを大切にできるようになるということです。似た言葉に「凡事徹底」がありますが、これも同じことでしょう。凡事を徹底すると凡事を疎かにしない習慣がつきます。昔の日本海軍には「小事を疎かにするものは必ず大事が疎かになる」という教えがありましたが、確かに凡事、つまりあたりまえのことをいい加減にする人は、大切なこともいい加減になると思います。「あたりまえを真剣に」行う習慣は、予想以上に大きな力を与えてくれると思います。言い方を少し変えましょう。私たちは「凡を徹底することにより非凡に到る」と考えていいのではないのでしょうか。反対に、非凡になろうとするなら凡を尽くすことだ、とも言えるでしょう。凡を尽くすことは、その場その場で終わりではなく、私たちの中に何かを積み上げてくれるように思います。君たちの勉強も同じです。

「量は質へと変わる」というのが、それに当たるのではないのでしょうか。勉強は毎日の小さな積み重ねです。知識は一日で身につくわけではありません。しかも、ある程度の量が頭に入るまでは何事も起こりません。よくわからない状態が続くわけです。しかし、日々の勉強を徹底すれば、頭に入った量が質へと変換する瞬間が経験できます。もやが一気に晴れるように、物事の本質が理解できるようになります。それが非凡に到るということです。辛抱強く「あたりまえを真剣に」行うのはそのためです。

冬休みのおすすめ

・南 杏子 『サイレント・ブレス』 (幻冬舎文庫)

医療関係の本は度々手に取ってきました。天久鷹央シリーズの知念実希人さんやチーム・バチスタの海堂尊さんは二人とも現役医師で、書くものは医療ミステリーが多いですね。南さんも現役医師ですが、こちらは犯人捜しのようなミステリーではなくて、恐らくご自身が経験されたことをヒントにして書いているのだらうというのが伝わってきます。非常に読みやすい文章を書かれる作家さんです。

大学病院から異動を命じられる水戸倫子が主人公。移動先のむさし訪問クリニックは在宅で最期を迎える患者のための在宅医療専門クリニック。倫子は治療や延命を拒否したり、家族と意見が合わなかったり、育児拒否のような、様々な患者に出会います。患者が最後を穏やかに過ごせるよう懸命に手を尽くそうとする倫子ですが、倫子自身も父の介護に関して母親の方針に疑問を持っています。

むさし訪問クリニックの茶髪の看護師武田康介(本書ではほとんど「コースケ」と表記されています)が実にいい青年で、言葉づかいは今どきの若者なのですがファンになりますよ、きっと。私は、いわゆる終末医療は最後は尊厳死の議論に行きつくように思います。忘れられない映画としては「世界一キライなあなたに」ですね。あれは本当に考えさせられました。君たちも観てごらん下さい。南さんは他にもたくさん書かれていますから、手に取ってみることをお勧めします。

・森 絵都 『カラフル』 (文春文庫)

これは二年前にも紹介しています。抜粋しながら再掲しますと…。大きな罪を犯して死んだ魂は輪廻のサイクルから外される。つまり二度と生まれ変わらない。ところがそんな僕の魂の前に「おめでとうございます、抽選に当たりました!」と言って天使が現れるところから物語が始まる。天使が言うには、今ちょうど死にかかっている体があるから、ちょっとそこへホームステイしてきなさい、と。そして一年以内に自分の犯した罪を思い出せたら輪廻のサイクルに戻してやろう、というわけ。これは天使のボスの命令ですから拒否権はない。選ばれたのは中学三年生の男子で、自殺未遂をして病院のベッドに横たわっている。その体に僕の魂が入ったのは、医者が男子の死を宣告して10分後。当然ながら大騒ぎ、生き返ったのですから。僕は新しく小林真(まこと)として生きることになるわけですが、父のこと、母のこと、兄のこと、好きな子のこと、それらの人間関係を真ではなく僕の手で再構築していく。

まだ読んでいない人、是非ご一読を! その他、何冊か挙げておきます。中には何度も紹介している本もあると思いますが、再読に耐えるはずですからね、これらは。

・荻原 浩 『神様からひと言』 (光文社文庫)

・ダニエル・キイス 『アルジャーノンに花束を』 (ハヤカワ文庫)

・遠藤周作 『沈黙』 (新潮文庫)

・高野和明 『ジェノサイド』(上・下) (角川文庫)

・柴田 翔 『贈る言葉』 (新潮文庫) 純文学の最高峰だと思います。

BGMは 野田愛実 の *butterfly effect* でした…。